

第14話 江戸幕府の中興

じつよう とうと ぶげい はげ 実用を尚 び武芸を励ます

それで、将軍になってからの政治の方針もまた、これらの経験の上に立って、専ら実用を宗とし、質素をすすめて華奢を避けることを主眼とした。家宣、家継の2代にわたって、白石がその前代の弊政を改革したことは前に話したが、それも僅かに8カ年の短い期間だったし、1つは彼が学者の出身であっただけに、武よりも文を重んじる傾きがあったので、元禄以来の奢侈贅沢の風はなお一般に行われて、武芸などは殆ど顧みられなかったのです。



八代将軍 徳川吉宗

たかのくぼう 鷹野公方

それで、吉宗は、武士は武士らしくすべきであると、先づ儉約の令を下し、自ら綿服を着け、金銀をちりばめた城門などを、惜しげなく壊させて手本を示し、一般士民にも儉約を守らせた上に、一方、しきりに武芸をすすめて、下総の小金が原に狩猟を試みたり、中川や隅田川で水泳、水馬の術を練習させたり、オランダ人を招いて部下に馬術を授けさせたりした。わけでも、吉宗は鷹狩りを非常に好んで、綿服、草鞋ばきのいでたちで、しばしば郊外に出かけたので、世に鷹野公方と綽名されたが、その鷹場ではまた、折々、不意にお供の輩に命じて、弓または鉄砲で鳥を獲らせたりしたので、旗本の間における遊惰の風は次第に矯正されて、弓術、砲術、騎射の達人なども多くあらわれるようになり、一般の士風もおのづから立直った。

おおおかただすけ 大岡忠相

吉宗はまた就職の年、即ち享保元年に、伊勢の山田奉行であった大岡忠相を挙げて普請奉行としたが、翌2年に、更にこれを江戸南町奉行とした。世に名高い大岡越前守が即ちこれで、忠相は時に41才でした。これより在職20年の間、忠相はよく人々の訴えを聴いて、きわめて公正な判決を下したので、世人から神の如くに尊敬された。

なお、彼が吉宗に登用されたに就いては、山田奉行時代の逸話が1つ伝えられている。--- これより先き、山田の農民と松坂の農民との間に田地の界の争いがあるが、松坂の農民のほうに不正であったにも拘わらず、松坂が紀伊家の領地だったので、今までの奉行は皆紀伊家にはばかってこれを決することが出来ずにいた。ところが、忠相が奉行となって赴くや否や、直ちにこれを決して、山田の農民の勝ちとした。この時、吉宗は紀伊藩主だったが、ひそかに其の公平なのに感じ、さてこそ、後に将軍になるに及んで忠相を召し出したのだということです。

おさだめがき
御定書百か条

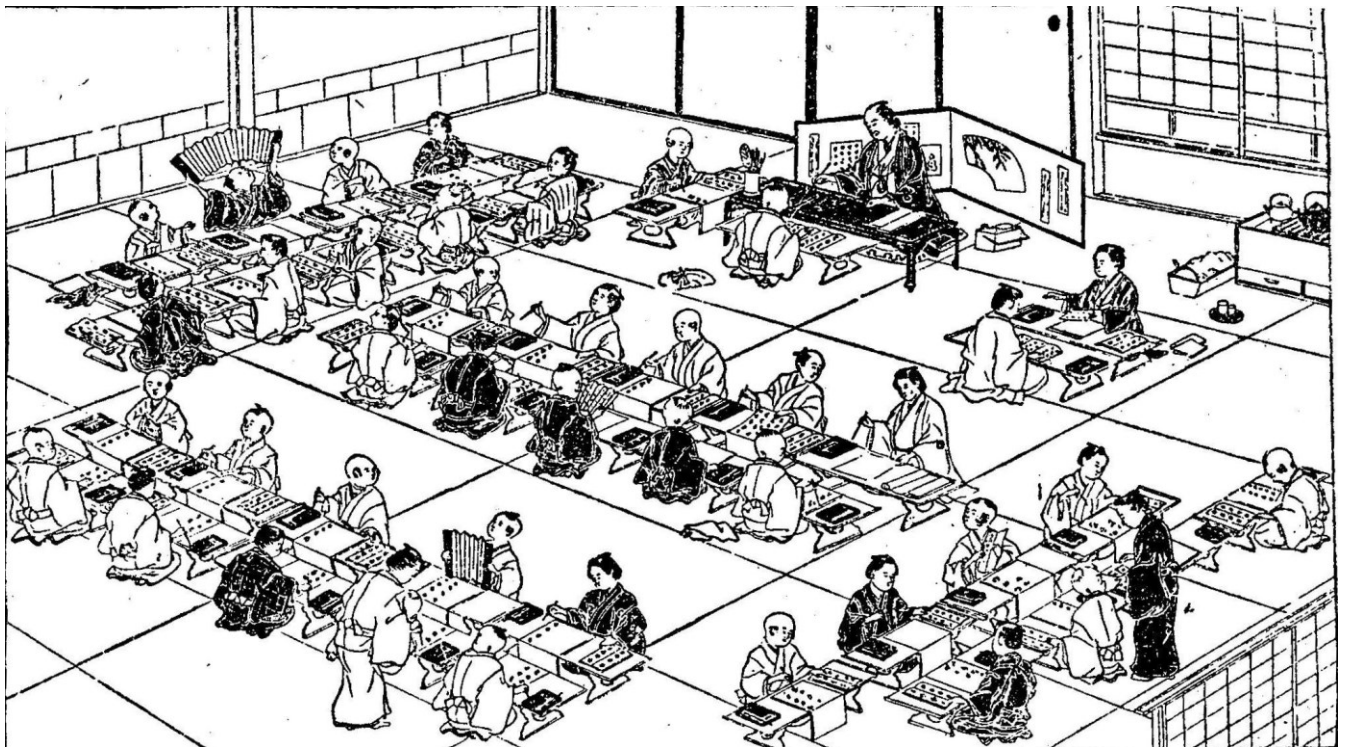
よしむね さいばん せんれい ところまか けつ
吉宗はまた、これまでの裁判が、ただ先例を参考にする外には全く奉行の心 任せに決したために、
おうおう ひょうじゅん きそく
往々にして公平を欠くことがあるのを見て、老中及び三奉行に命じて裁判の標 準となるべき規則を定め
みづか とうひ ほうぶん おさだめがき
させて、自らその当否を調べ、ついに百三か条の法文を作った。 御定書百か条というのがこれで、幕
けいほう はじ せいぶんほう
府の刑法がここに始めて成文法となったのです。

めやすばこ
目安箱

よしむね ひょうじょうしょ もんぜん そじょうばこ もう きぼう えんりよ
吉宗はまた、評定所の門前に訴状箱を設けて、人々に其の希望するところを遠慮なく書いて入れ
させて、手づからこれを開いたのです。 俗にこれを目安箱といった。 1 つは、直接に人々に訴えさせ
むじつ うった
て、無実の罪に苦しむ者などのないようにしようとしたのと、今 1 つは、何事によらず、民の欲するところ
たみ ほつ
ろを聞いて、政治上の参考にしようとしたのです。 小石川の薬園内に施薬所を設け、小石川養生園と
こいしかわ やくえんない せやくじょ もう こいしかわようじょうえん
名づけて、貧民に施療したのや、江戸市中に多かった藁葺きおよび板葺きの屋根を 瓦葺に改めて、とこ
わらぶ いたぶ やね かわらぶき あらた
ろどころに広 小 路または火除地といった空地を設けたりして、大火を防ごうとしたのなどは、この目安
ひろこうじ ひよけち あきち もう たいか
箱の投書に基づいた 1, 2 の例です。
とうしょ もと

ようしょ きん
洋書の禁をゆるめる

じつよう がく むろきゅうそう りく ゆえんぎ へい い きょうくんしよ わぶん やく
彼はまた実用の学を重んじ、室鳩巢に『六論衍義』という中国の平易な 教訓書を和文に訳させ、
てらこや くぼ じどう さつ つうぞく いしよ かんこう ひろ
これを寺子屋に配って児童に授けさせたり、通俗の医書を刊行して世に弘めた。
てんもん こよみ けんきゅう せいよう がくじゅつ せいみつ ゆうえき ようしょ
又、自ら天文や暦のことを研究しているうちに、西洋の学術の精密で有益なことを知って、洋書
きん しよせき ゆにゆう ゆる あおきぶんぞう
の禁をゆるめ、キリスト教に関係のない書籍の輸入を許し、特に青木文蔵にオランダ語および西洋の学
術を研究させたりした。



てらこや
寺小屋

第14話 江戸幕府の中興

あおきこんよう
青木昆陽

ぶんぞう ごう こんよう 文蔵は号を昆陽といた。江戸の人です。京都にのぼって伊藤東涯に学び、江戸に帰って、いわゆる実用の学を教えていたが、後に召出されて幕府に仕えた。昆陽は、予ねてオランダ文研究の希望を持っていたので、吉宗の命を受けると、遠く長崎に下り、オランダ人や通詞（通弁）に就いて蘭文、蘭語を学び、ついにわが国最初の蘭学者といわれるに至った。

なお、これより蘭学を学ぶ者が相ついで出で、西洋の学術が次第に我が国に入って来たので、吉宗はまた西洋文明輸入の元祖と言ってもよいわけです。

又、彼が將軍になった頃には、幕府の財政は頗る困難に陥り、富豪から借入れた借金が数十万両にもものぼった上に、地震、火災などが頻りに起こり、一方で、粗悪な貨幣は相変わらず市場に出回ったので、物価は高く、幕府は家臣に渡すべき扶持米にさえ差支えるような有様になっていた。

あげまい せい
上米の制

そこで、享保7年、吉宗は一策を案じた。諸大名の参勤交代の制を緩めて、江戸の在勤を半年に改める代わりに、一万石につき百石、即ち、石高の1/100の米を幕府に納めさせることにした。これを上米の制と言う。一体、諸大名は江戸にいと、内外の交際や、不時の贈物などでも多額の費用となり、従って、その家臣らもまた費用が多く、折角国許で貯蓄したのを江戸に持ってきて、空しく諸商人に吸取られるのが一般の有様でした。それを、今、大名の一年在府を半年に縮めれば、その費やすところも半ばに減じるわけで、上米を命じられても諸大名はなお利益の方が多いのです。即ち、上米の制度は、幕府も大名も共に都合のよい方策であったのです。

吉宗はこれによって府庫の窮乏を補った。次第に借財も返せば、家臣の俸禄をも順当にしてやると共に、一方で、貨幣を鑄直して、ほぼ慶長の古制に復し、一般の経済界をも順調に戻した。

こうして10年、享保16年になると、幕府の財政はやや、余裕すら生じるほどになったので、乃ち上米を廃して、参勤交代をもとの通りにした。

あしだか せい
足高の制

吉宗はまた、享保8年6月に足高の制を定めて、人材登用の道を開いた。そもそも幕府の諸役人の任用には、その役によって役高というものがあつた。例えば三千石の役高のところにかろくの家禄千石の者を任用すると、その不足額二千石を加増として賜り、その役を退いた後も、そのまま永く子孫にまで給せられる習慣になっていた。それで、幕府の歳出は年々増える一方であつたのみならず、このために、折角適当な人物があつても、加増にじゃまされて任用することの出来ない場合もあつたので、吉宗はこの加増を廃して、その在職中だけに不足額を補給することにした。そして、これを足高といた。例えば、五百石の家禄の者が役高千石のところ任用される時は、不足額の五百石を補給して千石とするが、その役をやめるか、或いは死んだ時は、元の家禄五百石に帰すのです。それで、幕府は、この後は少しも費用を増さずに、少録の者をも人物次第で、高い役にも登用することが出来るようになった。

第14話 江戸幕府の中興

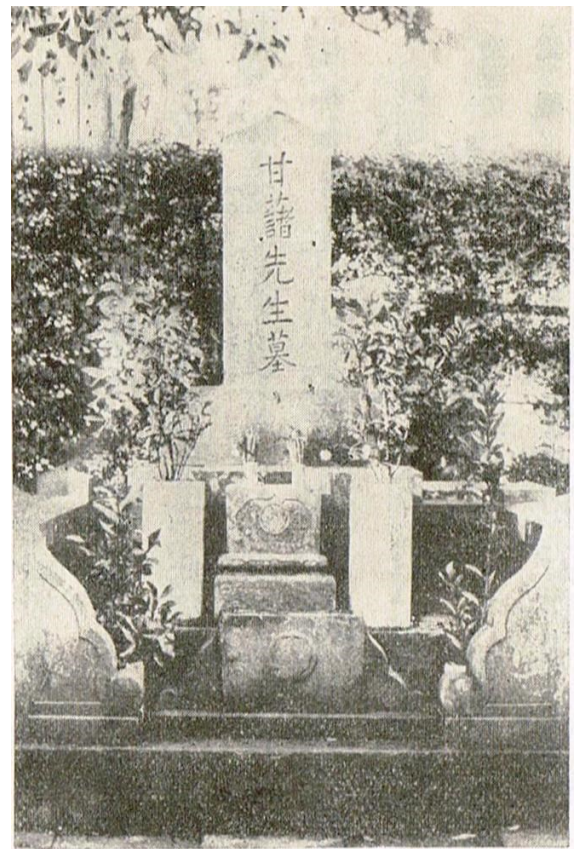
産業の奨励

吉宗はまた深く心を産業に使い、産物の種類や数量を多くすることに努力した。これまで砂糖は中国から輸入していたが、^{あたい} 価^{はなは} が甚だ高かったので、吉宗は甘蔗（さとうきび）の苗を取り寄せ、これを城中に植えて、砂糖の製造を研究させたので、年と共に産額が増し、後には製糖業が諸国に起こった。又、飢饉の年に備えるためにと、甘藷（さつまいも）の栽培を奨励したが、この時、青木文蔵が諸国にこれを弘めるに就いて力をつくしたのは名高い話です。文蔵はついに甘藷先生と呼ばれたが、その墓にもこの名が刻まれて、今も東京目黒の不動堂の裏に在ります。

この外、吉宗は朝鮮人参の栽培をすすめた。檀、竹などの繁殖をはからせたり、ペルシャ馬を輸入して馬の改良を図ったりしたが、殊に米穀は経済の本だからとて、大いに水利を興して新田を開かせたので、米の産額がいちじるしく増加した。それで、世人は吉宗を称して米将軍とも言った。

そうして、諸大名もまた将軍に倣って、競って藩内の産業を奨励したので、諸国の産物も次第に増した。上野、下野の織物、関東の生糸、紀伊の蜜柑、相模、薩摩の煙草、阿波の藍、土佐の鯉節、中国、四国の塩などを始め、今日の地理書に記される各地の重用な名産は、大抵この頃から起こって来たのです。

このように、吉宗は善政を行って世の中がよく治まったので、世にこれを江戸幕府中興の英主と言ひ、彼の治めた時代を享保の治とってたたえています。



東京目黒区 不動堂裏 甘藷先生の墓

(第14話 江戸幕府の中興 終わり。 次は前頁に戻り、第15話 松平定信の執政 に)